

國學院大學博物館 考古展示室特集展示

アジア鑄造技術史学会東京大会特集展示

「科学分析データに見る青銅器 ―館蔵資料の最新研究―」

開催期間：9月10日（火）～10月27日（日）10:00～18:00（入館は17:30まで）

休館日は不定期。博物館HPでご確認ください。

展示概要：弥生時代中期初頭に韓半島から日本列島へ流入した銅鏡・武器青銅器・銅鐸などの青銅器は、次第に本来の機能を失い、副葬品・埋納品として取り扱われるようになっていく。降って飛鳥時代には、仏教文化の影響を受けて仏像も鑄造されるようになった。平安時代後期になると、いわゆる国風化によって花鳥風月のような和風文様を描いた「和鏡」が出現。室町時代後期から江戸時代には、和鏡に把手を付けた「柄鏡」が主流となった。

目下、これら國學院大學博物館が収蔵する青銅器については、原材料の産地、製品の鑄造技術、そして出土状況などを解明するため、理科学的な分析や、3次元計測を含めた検討を進めている。そこで今回の展示では、出土地不詳資料の来歴が概ね確定できた事例や、製作技法の詳細が詳らかとなった事例を中心に、最新の研究成果を報告したい。